随想

日本をダメにする「清貧の思想」？

～「清豊」こそが社会成長のカギ～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

「投資家がお金より大切にしていること」という本がある（藤野英人著・星海社書房）。著者は早稲田大学を卒業し、野村證券、ＪＰモルガン、ゴールドマン・サックス系の資産運用会社を経て投資会社を創業、高いパフォーマンスを上げている、という。目次を見るとちょっとショックを受ける。ざっと紹介すると、第一章「日本人はお金が大好きで、ケチで、ハゲタカで、不真面目」、第二章「日本をダメにする清貧の思想」、第三章「人は、ただ生きているだけで価値がある」、第四章「世の中に虚業なんて一つもない」、第五章「あなたは、自分の人生をかけて社会に投資しているひとりの『投資家』だ」。とくに、第一章の「日本人はお金が大好きで、ハゲタカで、不真面目」と第二章の「日本をダメにする清貧の思想」が、著者にとってこれまで日本人に抱いていたイメージと大きくずれている。日本人は清貧を良しとし金を疎んじる傾向が強いと信じていたし、世界で最も真面目な人種で、だから新幹線を始めとする各種交通機関もダイヤに忠実で、また一分遅れても係員がアナウンスすると思っていたからである。金が大好きなのは日本人に限らないであろうが、特筆するほどに日本人が金好きであるとも思えない。

しかし、読み進むうちになるほどと思わされることが多い。本の内容で、「八割の学生が『お金儲け＝悪』」「投資の話をすると年寄りから『汗水垂らして働け』と…」という表の面と、お金が大好きな裏の面があると解説され、その根拠を示されるとうなずいてしまう。その根拠は「日・米・英・独・仏の個人金融資産の比較表＝二〇〇八年末／投資一八番より（http://stockkabusiki.com/blog-entry・883.html）」で上げられている各国の数値である。概要を示すと日本：一、四二七兆円、アメリカ：三、一七五兆円、イギリス：四八〇兆円、ドイツ：五六〇兆円、フランス：四四六兆円であり、その中で現金・預金の比率は、日本：五五・七％、アメリカ：一五・三％、イギリス：三二・二％、ドイツ：三九・四％、フランス：三一・三％となっている。この数字を見ると、日本人がお金好きという話にも納得する。著者の藤野氏は「日本人はお金が好きだからこそ金から顔を背ける」という。

またケチでハゲタカというのも、著者のイメージならアメリカのヘッジファンドを指すと決め付けていた。しかし同氏の説によれば、日本人は個人では先進諸国に比べて寄附をしない（先進諸国では三％、日本〇・〇八％）であり、アメリカのヘッジファンド並みに損得で投資先を短期に切り替える。上昇するブラジル株への八兆円もの投資と、元本割れリスクへの反応による売りにブラジル・レアルが暴落した事実を例として説明されると、日本人も他国民と何

ら変わらないか、場合によってはそれに輪をかけた特性があるのか、と思ってしまう（株の利益獲得原理から、こうした売り買いは資本主義ならどこでも起きる現象であろうが…意外にも外国では投資信託を二〇～三〇年のスパンで持つのが一般的とか）。この項のまとめで氏は「日本人は他人も政府も会社もＮＰＯも信じず、だからこそ金を信じるのだ」と書いている。氏はこう極端に書くことで、金以外に信じるものがあることを強調したいのであろう。

次いで清貧について。この項では「英雄」を比較している。アメリカの英雄は民間人で、日本の英雄は公務員という対比は思いがけない切り口である。スーパーマンは新聞記者、スパイダーマンは学生、サンダーバードも土木建築業の富豪がオーナーなのに対して、ウルトラマン、遠山の金さん等の日本の英雄は公務員である（なるほど）。公務員であるため金には恬淡としている（基本清貧ということに結び付く）。この清貧という思想が、そもそも問題だという。

確かに明治維新の前後、武家政治は運営の危機に頻し、薩摩藩では商人からの五〇〇万両という天文学的な借り入れで藩の運営を賄っていた（結局調所広郷という一代家老の采配で踏み倒している）。「金儲けは汚いもの」というイメージは確かにある。公務員から製薬会社に転職すると告げたとき、武家の家系であることを心していた著者の両親は、この転身に反対はしないものの、ガッカリした様子を見て取ることができた。新卒者の多くが公務員を目指すのは、終生身分が安定しているからという以外に、このような潜在意識が働いているのかもしれない。

先に挙げた薩摩藩では、巨額の借金を事実上の踏み倒しで処理し、密貿易と砂糖の専売制で蓄財して資金とした。この資金なしに、薩摩藩が明治維新で指導的な位置を占めることは困難であったことは明らかである。

著者はこれまで、明治維新を成功させた表舞台の立役者（西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬、木戸孝充等）を誰がバックボーンとして資金面で支えていたのか興味があった。薩摩出身の西郷・大久保のように蓄財のある藩が支えていた人物は経済的にさほどの苦労がなかったであろうが、坂本龍馬のような脱藩浪人では、バックに何らかの資本家がいない限り、毎日湯水のように遊ぶ金は生まれてこないであろう。行き詰まった武家政治を見限った商人が、政治改革を望む下級武士の後押しをした事実を検証した書物もある。

「西欧諸国で富を得たいわゆる富豪は、その富を社会へ還元させることで人生の終結を目指す」と藤野氏は主張する。

アメリカやイギリス等の極端な所得格差をわが国のそれと比較すればまだましな気もするが、一方でビル・ゲイツ（マイクロソフト・オーナー）の巨額の社会への寄附を考えると、この説に全面的に納得するわけではないが、個人資産が一、三〇〇兆円ともいわれるこの国の蓄積と、それに依存する国債で国が維持されている実態を考えると、何となく同意したくもなる。

この本の中頃に「清豊（せいほう）の思想」が主張されている。清貧とは異なり、豊かでかつ清らかであることは可能だ、という。清く豊かに生きることは可能で、清豊を目指すことが結果的に会社を長期間成長させることに繋がるという。会社は社会に置き換えられる。そしてインド人経営者の言葉を借りて「私の成功は長期的な人間関係を築いて、人に奉仕することだ」と、会社経営を含む社会活動の意義を示唆している。

この本のタイトル「投資家がお金よりも大切にしていること」とは、ヒトとヒトの結び付きを原点にしようということ、金は社会（会社）形成の必要条件ではあるが十分条件ではないことを示そうとしていると考える。「そうなるために、業界人がどうあるべきか」は、これからも追い求めるべきテーマである。